

家族と市場の境界～沖縄・先島の風に吹かれて～

上智大学経済学部 教授 竹田 陽介

「ここ十年ばかり、沖縄へゆくたびに、自分の中に沖縄についての知識や実感が堆積したが、それがみな断片ばかりで、しかもどの断片も、そそり立つようにして自己を主張しているのである。」

「沖縄を知るには、困難さが一つある。沖縄のほかに、『沖縄問題』というもう一つの世界がある。論じられている沖縄というこの実体があるかのような無いかのような厄介ものを避けて通るわけにもいかず、かといってそれらの論旨にいちいち引っかかってゆくのは、私の旅の趣旨ではない。さらに厄介なことには、私の中にも沖縄問題があることである。」

「ここ数年そのことを考えてみたが、圧倒的におなじになり、日本における近代国家とは何かという単一の問題になってしまうように思える。」

司馬遼太郎『街道をゆく 6 沖縄・先島への道』(朝日文庫, 2008 年)

司馬遼太郎の「私の旅」を「私の研究」に置き換えてみる。すると、司馬の中の沖縄問題である「日本における近代国家とは何か」という問いに代わり、自分の中にそそり立ってくるのは、私の中にある沖縄問題、「日本における家族とは何か」である。

台風の進路にあたる沖縄・先島。台風の合い間を縫って、ここ数年珊瑚の白砂を踏みしめる。当初は、経済データを片手に研究仲間とともに、現地の行政機関や在沖の金融機関を訪れ、断片的な知識や実感を積み重ねた。10%を超える米軍基地施設面積割合の高さが示す、括弧付きの『沖縄問題』は厳然とあるものの、沖縄・先島の歴史はそれに留まらない。

一人当たり県民所得、就業率、完全失業率、有効求人倍率、いずれの指標でも全国最低。一方、少子・高齢化社会の進行のなかで、人口増加率、出生率、老年人口割合は目立って良好。婚姻率が高い一方、離婚率、母子世帯割合は全国一位。子どものいる世帯の一人当たりの可処分所得が貧困基準を下回る世帯の比率(子どもの貧困率)は、全国の水準の倍近い値を示す。いずれの指標も、沖縄の家族が、血縁あるいは地縁を頼りに互いに助け合わざるを得ない社会の現実を映す。

沖縄本島：敗戦直後、「沖縄では米国占領軍が枠組みをつくり、長期的な資金投資をする人びとは県庁所在地である那覇に事業所を置くよう求められた。沖縄県の公的な銀行であった琉球銀行は、東京の日本銀行と直接に業務提携してこの方針を推進した。しかし沖縄市民の目が向けられたのは、この地域で舂あるいは模合と呼ばれていた伝統的な相互扶助組織である講であった」(テツオ・ナジタ『相互扶助の経済 無尽講・報徳の民衆思想史』みすず書房, 2015 年)。現在も相互扶助のための模合は生き続け、個人企業の資金調達の目的は後退したものの、職場や同級生の仲間が飲み会などの個人的

な親睦のために、少額の掛金で一人二、三口は常時加入しているようだ。

発行部数を競う『琉球新報』、『沖縄タイムス』の夕刊で目に付くのが、訃報広告。弔られる死者の家系・経歴、通夜葬式の式次第が細かく載る。費用は一広告 10 万から 15 万円が相場だそう。車同士の軽い接触程度の事故ならお互い様で示談、損害・生命保険の加入率が全国最低レベルの沖縄で、訃報広告に備えた保険が少額の掛金で商品化されている。

宮古島：琉球王朝期に王都首里でしか泡盛の製造が許可されていなかった時代から、宮古島ではオトリーという習慣が息づく。飲み会で「親」が口上を述べ、参加者が順番に泡盛を乾杯していく風習。貴重であった泡盛を男女や社会的地位に関わりなく平等に飲めるように工夫され、口上で発揮される社交の術が研かれる。

大塚家具や大戸屋などファミリー・ビジネスの家督相続を巡る親族の対立が喧しく伝えられるが、中小企業の事業承継が円滑に行かないのは沖縄も同じ。宮古島商工会議所の会員である経営者とその子息等の両者を対象としたアンケート調査で、多くの経営者が引退後の事業継続は未決定であると回答。近親者である子息等は、事業の地域への貢献の魅力は親と共有するが、事業承継に必要な要素については、親子の意見の一致は見られない。

石垣島：大型旅客機の離着陸可能な滑走路を満たさない旧石垣空港に替わって建設された「南ぬ島石垣空港」は、新空港の計画発表から 2013 年の供用まで 34 年を要した。その間、白保の珊瑚礁の生態系の保護などを理由に反対運動が拡がり、建設計画の二転三転があった。石垣島の歴史的経緯からわかることは、血縁よりも地縁の方が強いコミュニティでは、生活の場の環境保全に対する意識が高いのかもしれない。

与那国島：サトウキビ栽培に島民の雇用が大きく依存してきた与那国島では、自生する長命草という作物で、島おこしを凶る。農薬いらず鎌一つで収穫できる長命草は、とりわけ与那国島産は品質が高い。健康食品を開発する資生堂が目をつけ、農家との直接取引を行い、島おこしのみならず、環境保全にも繋がる長命草の栽培をサポートする。

こうして足で稼いだ知識や実感の断片から、地縁あるいは血縁に基づく拡大家族の相互扶助の精神「結いまる」が、ウチナンチュの社会的なアイデンティティを形成していると、圧倒的におなじ結論に至る。

英国では、産業革命期以降、児童労働が恒常化し、工場法による年少者の工場雇用を禁止した。19 世紀半ばの英国社会に身を置いた思想家ジョン・スチュアート・ミルはいう。「世間の人、ほとんど、子供とは文字通りに、比喩的にはなしに、親の一部であるかのように考える。したがって、親の子供に対する絶対的排他的な支配権に対して、法律がいささかでも干渉を加えようとするに対しては、世論は甚しい用心深さを示すのであって、その用心深さは、親自身の行為の自由に対するほとんどいかなる干渉に対するよりももっと激しいのである。このように、人類の大多数が自由を尊重することは、権力を尊重することに遥かに及ばないのである」（『自由論』、岩波文庫、1971 年）。子どもの親からの自由を保護するために、信頼に足る義務教育の実施をミルは訴えた。

成熟した人口減少社会における個人の自由への存在論的不安。世代間扶養に基づく社会保障制度の持続可能性への懸念。日本において家族のあり方がアジェンダとして浮かび上がる社会的背景は漆黒の闇にある。国家と個人の間介在する家族のイメージを究めて、日本における家族とは何かという

沖縄問題を内にかかえる経済学者。沖縄・先島の現場でどう考えるか。ヒントは、「企業と市場の境界」の問題について考えた二人の碩学，ロナルド・コースとフランク・ナイトにある。市場間の取引費用と企業内の経営費用を比較するロナルド・コース，効率的なリスク・シェアリングのための制度として企業と市場を比較するフランク・ナイト。「企業」を「家族」に置き換えてみると，家族と市場の境界が見えてくる。

The answer, my friend, is blowin' in the wind,

The answer is blowin' in the wind.